

## マレーシア結成と対決政策の最新研究動向

鈴木 陽一\*

Subritzky, John, *Confronting Sukarno: British, American, Australian and New Zealand Diplomacy in the Malaysian-Indonesian Confrontation, 1961-1965* (London: Macmillan Press, 2000).

Jones, Matthew, *Conflict and Confrontation in South East Asia, 1961-1965: Britain, the United States and the Creation of Malaysia* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002).

### はじめに

近年、マレーシア構想提唱からインドネシア対決政策終焉に至るまでの海域東南アジア政治史研究が急速に進んでいる。言うまでもなく、この類の研究が重要なのは、この時代、長らくあった大マレー国家への夢が完全に潰えた、ということにある。一方、マラヤ連邦がシンガポールと英領ボルネオを併合しようとしたのに対し、他方、インドネシア・フィリピンが異を唱え、マレー国家連合・マフィンドをつくろうとした。しかし結局、マラヤ連邦はシンガポール・ブルネイの併合に失敗し、マフィンドもまた瓦解していった。そこにはマレーシア、シンガポール、ブルネイ、インドネシア、東チモール、フィリピンといった国家群が誕生することになったのである。

研究隆盛の背景には、英語諸国、特にイギリスにおける公文書公開がある。マレーシア形成に関する植民地省文書が公開されたのは、1995年11

月のことである<sup>1</sup>。私事になるが、偶然そこに居合わせた私も、これを契機にマレーシア脱植民地化の研究を本格的に始めることにした、という経緯がある。これまでソピーのマレーシア形成に関する研究(Sopiee 1976)、マッキーのインドネシア対決政策に関する研究(Mackie 1974)などはあったものの、新聞の切り抜きで書かれた研究ゆえ、事実関係の把握には限界があった<sup>2</sup>。

今までのところ代表的研究は表題に当てた二書である。サブリツキーの研究は英語諸国のインドネシア対決政策への対応に焦点を当てている。ケンブリッジ大学へ提出した博士論文(Subritzky 1997)をベースにしたものと思われる。ジョーンズの研究は当時の国際関係の把握を主眼としながらも、マレーシア形成、シンガポール分離という国家形成についてもよく分析している。彼はこの研究の発表に先立って一部抜粋したような論文(Jones 2000)も記している。

---

\* 上智大学アジア文化研究所共同研究員

<sup>1</sup> イギリスの公文書は30年ルールで公開される。ただ、同文書は整理に手間取り、この年になって公開された。英米では、公開された公文書を史料集として編纂することが多い。マラヤ連邦の脱植民地化についてはすでに史料集が出版されているが、マレーシアの形成についてははまだ編纂中の模様である。アメリカの東南アジア政策についての史料集は近年刊行されている。これら史料集は参考文献に記した。

<sup>2</sup> もっとも、東南アジア諸国の公文書の公開はほとんど進んでいない。リー・クアンユーやガザリ・シャーフィーなどの回顧録が出されているだけである。結果、これら最近の研究は英語諸国から見たバイアスのかかったものとなっている。なお、主だった回顧録は参考文献に記した。

この書評では、以下、最近の研究動向について、マレーシア形成と対決政策とに分け、上記二書を中心に言及しながら紹介していくことにする<sup>3</sup>。

## 1. マレーシア形成

まず、浮かび上がってきたのは、これまでマレーシア構想はトUNK・アブドゥル・ラーマン提唱によるとされてきたところ、実は、その起源はイギリス植民地政策にあった、という驚くべき事実である。このことは史料公開後早々に指摘(Suzuki 1996, 鈴木 1998, Stockwell 1998)され、1998年には、リー・クアンユー(元シンガポール首相)もその回顧録(Lee 1998)のなかでその大筋を認めている。

上記二書、特にジョーンズの研究はこうした知見を強調し、イギリスのマレーシア形成へ関わりを解明しようとしている。設立交渉におけるマラヤ連邦政府とシンガポール政府、ボルネオ植民地官僚との対立を解消するため、イギリス政府首脳の中介が果たした役割が非常に大きかったことが明らかとなった。

研究の結果、マレーシア構想をイギリス帝国再編とする見方も成立しうらようになっていく(Stockwell 1998, 鈴木 2001)。当時、マレーシア構想に反対したインドネシアはこれを新植民地主義と決め付けたが、それはあながち間違いではなかった。

このほか、最近の研究ではシンガポール分離におけるシンガポール側のイニシアティブを重視する見解も台頭してきた。分離は *expel* ではなく、*exodus* であった、という見方である。ラウ(Lau

1998)は、連邦政府とシンガポール州政府とのあいだにシンガポールが連邦から *disengage* するため秘密交渉があったこと、それがイギリスの妨害にあって頓挫し、結局、両者は完全分離という道を選んだこと、を指摘している<sup>4</sup>。

これは、突き詰めると、1965年の「マレーシア人のためのマレーシア」という人民行動党の運動は連邦の抑圧から脱出するための梃子であり、分離時のリー首相の涙はアリバイ作りのための嘘泣きであった、ということにもなりかねない<sup>5</sup>。

## 2. 対決政策

1965年以降、英米がスカルノを意図的に追い詰めていった、という事実が判明した。対決政策が掲げられた当時、アメリカ・ケネディ家がスカルノに好意的であったことはよく知られている。しかし、結局、アメリカも強硬政策へと転じ、和平を望むスカルノの追い落としを望むようになって行ったのである。

イギリスの政策について研究を初めて手掛けたのはイースター(Easter 1998)であった。サブリツキーやジョーンズの研究は加えてアメリカの政策も解明することで、スカルノが英語諸国によって追い詰められていく様子を描き出している。もっとも、取り沙汰されてきた9月30日事件への英米の関与が明らかとなったというわけではない。

このほか、最近の研究では、対決政策終結にあたって日本の中介工作が重要な役割を果たしたこ

<sup>3</sup> 本文では言及できない研究も二、三あるが、それらも参考文献に記した。

<sup>4</sup> ラウの研究は、イギリス連邦関係省史料の公開前に、同首相府やオーストラリア外務省の史料をもとに書かれたものであるが、話の大筋は後の史料公開によっても支持される。

<sup>5</sup> 例の有名な記者会見の様子はシンガポール国立博物館でいつでも見ることができる。

と(宮城 2002)、その後インドネシア主導の地域秩序が形成されるのにアメリカが関わったこと(Suzuki 2000)、なども明らかとなっている<sup>6</sup>。

### おわりに

未だ判然としない事実関係は多い。ブルネイの脱植民地化、分離後のマレーシア・シンガポール関係、英米の9月30日事件への関わりなど、分かっていることには重要なことも少なくない<sup>7</sup>。ただ、それでも、ここでは近年の英語諸国の史料公開によって、国家形成、地域秩序形成への英米の強い関与が明らかになり、これまでの歴史が書き直されつつあることはよく報告できたように思う。

それでは、こうした研究の結果、東南アジア人は英米の戦略によって分断され、英語人主導のグローバル資本主義秩序のなかに組み込まれていった、という見解に我々は達したのであろうか。確かに、これらの研究は英語諸国の文書に基づいて書かれた視点が偏ったものとはいえ、マレーシアやシンガポール、インドネシアの公式言説が極めて危ういものであったことを示している。マレーシア構想の起源はイギリスにあり、その後沸き起こった地域主義もアメリカの支持を後ろ盾にしていた。

しかし、新事実のなか最も見逃してはならないのは、東南アジア人がそうした外部の力を利用しつつ、

国家や地域秩序を主体的に構築していった、ということのように思われる。マレーシア構想やマフィインドはその本質というよりは、自らを構築していくための選択肢であった、とも解釈できる。その意味でこれらの研究は彼らの公式の歴史を構築主義的に見直す契機を提供している。史料公開に伴う事実関係の再検証という作業は進んでいるものの、歴史の意味付けという作業はまだ始まったばかりと言える。

### 参考文献

#### 史料集

*British Documents on the End of Empire (BDEE)*

Series A, Vol.3, (London: HMSO, 1994).

Series A, Vol.4, (London: HMSO, 2000).

Series B, Vol.3, (London: HMSO, 1995).

*Asia: Official British Documents 1945-65*

CD-ROM (Routledge, 1999).

*Foreign Relations of the United States (FRUS)*

1964-1968, Vol.XXIII, (Washington: GPO, 1995).

1964-1968, Vol.XXVI, (Washington: GPO, 2001).

1964-1968, Vol.XXVII, (Washington: GPO, 2000).

#### 回顧録

Ghazali Shafie, *Ghazali Shafie's Memoir on the Formation of Malaysia* (Bangi : Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia, 1998).

Lee Kuan Yew, *The Singapore Story*:

<sup>6</sup> 日本政府による仲介工作については、英米の史料に加え、最近の外務省外交史料館における史料公開(16回平成12年12月20日、第17回平成14年12月24日)によってその一部が明らかとなった。

<sup>7</sup> ブルネイの脱植民地化についてはフセインミヤの研究(Hussainmiya 1995)がある。そのインパクトについてはこのニューズレターの先の号で報告した。ただ、これは、1963年にブルネイがマレーシア参加を見送ったところまでしか実質的にカバーしていない。

- Memoirs of Lee Kuan Yew* (Singapore: Times Editions, 1998).
- Tunku Abdul Rahman Putra al-Haj, *Looking Back: Monday Musings and Memories* (Kuala Lumpur: Pustaka Antara, 1970).
- 研究書・論文
- Easter, David, *British Defence Policy in South East Asia and Confrontation 1960-66* Ph.D. Dissertation, University of London, 1998.
- Hussainmiya, B. A., *Sultan Omar Ali Saifuddin III and Britain: The Making of Brunei Darussalam* (Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1995).
- Jones, Matthew, "Creating Malaysia: Singapore Security, the Borneo Territories, and the Contours of British Policy, 1961-63," *The Journal of Imperial and Commonwealth History*, Vol.28, No.2(May 2000).
- Lau, Albert, *A Moment of Anguish: Singapore in Malaysia and the Politics of Disengagement* (Singapore: Times Academic Press, 1998).
- Mackie, J. A., *Konfrontasi: The Indonesia-Malaysia Dispute, 1963-1966* (London: Oxford University Press, 1974).
- 宮城大蔵「ふたつのアジア・アフリカ会議と日本・中国」『中国 21』14号(2002年)。
- Murphy, Ann Marie, *From Conflict to Cooperation in Southeast Asia, 1961-1967: The Disputes Arising out of the Creation of Malaysia and the Establishment of the Association of Southeast Asian Nations (ASEAN)*, Ph.D. Dissertation, Columbia University, 2002.
- Poulgrain, Greg, *The Genesis of Konfrontasi: Malaysia Burnei Indonesia 1945-1965* (Bathurst: Crawford House Publishing, 1998).
- Sopiee, Mohamed Noordin, *From Malayan Union to Singapore Separation: Political Unification in the Malaysia Region, 1945-65* (Kuala Lumpur: University of Malaya Press, 1976).
- Stockwell, A. J., "Malaysia: The Making of a Neo-Colony?" *The Journal of Imperial and Commonwealth History*, Vol.26, No.2(1998).
- Subritzky, J. A., *Britain, the United States, Australia, New Zealand and the Malaysian-Indonesian Confrontation*, Ph.D. Dissertation, University of Cambridge, 1997.
- Suzuki Yoichi, "Greater Malaysia: Tunku, Lee Kuan Yew and British Policy," The 14th Conference of the International Association of Historians of Asia in Bangkok, Thailand, May 23rd, 1996.
- "The Origins of Southeast Asian Regional Cooperation: Local Initiatives and Anglo-American Cold War Strategies," The 16th Conference of the International Association of Historians of Asia in Kota Kinabalu, Malaysia, July 27th, 2000.
- 鈴木陽一「マレーシア構想の起源」『上智アジア学』16号(1998年)。
- 「グレーター・マレーシア、1961-1967 帝国の黄昏と東南アジア人」『国際政治』126号(2001年2月)。